説教節の主題による見世物オペラ

身毒丸

寺山修司

身毒丸

人物

ままはは母・先生
語り手・女学生
父
しんとく
せんさく
見世物呼び込み男
柳田国男・生徒1・黒衣
生徒2・黒衣
松葉杖の座長・生徒3・黒衣
間引女1（鬼子母）
間引女2（鬼子母）
見世物空気男・侏儒少年
一寸法師・福助
女相撲・鬼子母
中学生
鬼子母・見世物碁盤娘
帯娘・幻の母1
侏儒少女・幻の母2
ろくろ首・幻の母3
幻の母4
幻の母5
幻の母6
黒衣1
黒衣2
黒衣3
黒衣4
娼婦

身毒丸

1――慈悲心鳥

・

黒衣が拍子木を打ち鳴らしながら、客席、楽屋、舞台などを歩きまわっている。夕闇の立ちこめている舞台袖に他の黒衣が辻堂を設けている。終って、一人の黒衣が、人の声で「ほろほろ」と慈悲心鳥のように啼く。と、それに呼応するように他の黒衣がこたえる。二羽、三羽、と啼きひろがってゆき、すっかり日が暮れる。ふいにどこからか寺の鐘の音。それを合図のように黒衣、姿を消し、場内、暗黒となる。

燈火入ると、辻堂に、一人の物もらい、琵琶をわが子のように抱き奏でている。

〜まなざしの
おちゆく彼方ひらひらと
蝶になりゆく
母のまぼろし
てのひらに
百遍母の名を書かば
生くる卒塔婆の
手とならむかな

客席の中央の仮舞台で一人の女学生が後向きで手毬をついている。通りかかった紺絣の書生、目かくしをしたまま、その女学生に語りかける。

書生　アノ、つかぬことを伺いますが、

女学生　（ふりむきもせず、手毬をつきつづけている）

書生　この近くに、鉄道線路はないでしょうか？

女学生　（手毬をついている）

書生　数日前、すぐ近くで汽笛の音をきいたのですが、どう歩いても、線路が見つかりません。（問わず語りで）ぼくの乗る汽車はもう発ってしまったのか、それともまだ来ないのか……。ねえ、きみ。ぼくは迷子になってしまったのだろうか？

女学生　（手毬をついている）

書生　急がなくちゃいけない、ぼくの体は癩病に蝕まれている。ぼくは死ぬ前にせめて一度だけでも、生みの母親の顔を見ておきたいと思って、その消息を知っているという看護婦をさがしあてたのですが、看護婦は去年の大つごもりに三つになる子を連れて、嫁ぎ先を家出したあとでした。顔だけでもと思って、たのんで写真を見せてもらったらば、何と、わたしの生みの母には顔がなかったのです。

と、女学生、手毬をつきながら、くるりとふりかえる。するとその女学生にも顔がないのだ。
叩きつけるように合唱曲。

〝流涕焦がれて嘆かるる
いまは嘆きてかなわじと
時合かなえば鳴る鐘や
（ごうん、ごうん、ごうん）
これは夢かや、現かや
現の今のなにかとて
年にも足らぬそれがしを
ひとり残して十六夜に
母は先立ちたまうぞや
母は先立ちたまうぞや

その一節ごとに見世物小屋に灯りがともる。珍種畸型、東京見世物、二面相一寸法師、碁盤娘、逆さ首、福助、生き人形、といった

看板が見える。顔のない呼込の下足男、一銭見物の幕をたぐって顔のない蛇娘を見せる、顔のない松葉杖の座長。そして看板の下に集まっている二、三の顔のない客たち。はげしい風に吹きさらされて、さながら地獄へ迷いこんでしまったように、呆然と立ちつくす書生、思わず、

書生　ああ、また汽笛が……ぼくは自分の乗る汽車を見たい！

と呟いて、目かくしをとる。たちまち暗黒の帳がおりて舞台のまぶたをとざす。

暗転。

2――蛇娘

・

語り手　萩、尾花、葛、男女花、藤袴、桔梗とかぞえて、一つ忘れた秋の七草。

夕日が背戸山の森に沈んで暗くなる頃、今日も客のない見世物小屋は、早々と片付けをはじめます。二面相一寸法師が、幟をたたんで

いる。境内、天幕の裡、そして、外の基地まで、どっと笑いが湧き拍手喝采のあったのは、もう何年も昔のはなし。いまは秋風の吹くにまかせて集まる客もなく、ときどき木戸銭も払わずに駈けこんできた近所の子供たちが、かくれ遊びに蓆をめくったり、垂らしたり。ふいに泣きいだして、救いをもとめたおさなごも、いざりの下足番に認められて、いまはひとの子の妻。かげ草は、さきが赤くなってのび放題、ときどき、唐草模様の風呂敷包みを持って夜逃げしていった電気の裏方の噂がでるほか、これといった大事もない今日この頃でございます。「ああ、また秋か」と座長が言います。「蓮ももう、形はあるまいなあ」。それでも、耳をすますと……（と、ジンタの高鳴りと共に、呼込み男の声が、幻のように、どこからか聞こえてくる）

呼込男　さあさあ、今回見ていただくものは、拵えもの、作りものではございません。

先日お母さんのお腹から出たこの姉さん、花も恥らう年頃なのに、体中びっしりと鱗が生えました。顔はにんげん、からだは、蛇。どうぞ入ってごらん下さい。ハイ、お金はあとでいいですから、どうぞ入ってごらん下さい。いま、生きた鶏をムシャムシャ食べていま

す。好きで食べるのか、病いで食べるのか、毎日一羽食べます。うそや出艝目言ってるのじゃありません。正真正銘の蛇娘です。お母さん、どんな悪いことしたんでしょうね。ハイ、お金あとでいいですよ、どうぞ入ってごらん下さい。

あッ　危い、あんまり近づくと危険です。ときどき、若い男、いい男を見ると、蛇娘も年頃なので色気を出します。（キャーッという女の悲鳴と、どっとわきあがる笑い声）そうそう、ガブッ、と食いつきますからね。ホーラ、ホラ、ホラ。場内の電気が消えますよ。蛇娘が下半身の蛇の体を使って、舞台のはしからはしまで、のたりのたりと踊り出るようです。

蛇娘は、どのジャバラとどのジャバラを使うのか、さあ、よく見て下さい。暗闇の中で純情可憐の鱗が光る……小雨のような不気味な音をたてながら、そろりそろりとうまく立ちあがったら、拍手をお願いします。ハイッー！（と幻の拍手喝采――やがて一陣の風が吹き起って、その拍手をかき消してしまう。再び、もとの静粛。）

そのあいだに、入ってきたしんとくとその父親、見世物小屋の楽屋

口に垂らした筵戸をめくって、中を覗きこみ、何やら相談している気配。父親、煙管に火をつけて煙草を吸っているが、やがて、それをしんとくに渡して吸わせる。しんとく、まだ中学生であるが、ひるまず、それを深く吸う。と、筵戸の中から、一寸法師が女物の赤い帯を引っぱって出てくる。思わず、物蔭にかくれてそれを見遣る父子。どこまでものびてゆく長い帯。

〜逃げ道を帯の長さで
　はかるなり
　呉服屋地獄より嫁ぎきて

一寸法師逃げたあと、しんとくと父親、思い切ったように筵戸をめくる。

と、楽屋の中は空っぽで誰もいなかった。ただ、お雛様だけが、煌煌と五段に灯っていたのである。

語り手　追いつめられた一座は、食いつなぐために娘を売りはじめ

ました。四つん這いから立ちあがった東京名物の犬女や鱗を外した蛇娘たちが髪を結いあげ、合わせ鏡に撫子の花をかくしていそいそとうしろ姿で小屋を捨てます。

売り文句は一応社会慈善を装うての仏方便。「母のない子に母親をおわけします」。というものですが買いにくるのは、女房に逃げられた米屋町の大工とか飲んだくれで子無しの車引き。それでもたまに先妻に死なれた巡査や学校の先生が、子の手を引いて後妻を買いにやってきます。

「どうだ、しんとく。あの、円髷の女は？」

「……」

「お父さんは気に入ったぞ。面痩せては見えるが、鼻筋が通っている。死んだお母さんより、ずっといい女だ」

「あれは、蛇娘だよ、お父さん」

父親、笑って相手にせず、「見世物のいかさまを真に受ける莫迦がどこにある」と、寝姿の美しい女を、後妻にえらびます。

しんとく、たまりかねたように学生服のポケットから黒布をとり出して目かくしをする。

たちまち、見世物小屋の全景、極彩色をとりもどす。

（静かな交声曲にかわって）

〜深くあわせた　胸のうえ
片手をのせて　しっかりと
乳房おさえた　気強さは
蒼味を帯びて　もの凄く
なむあみだぶつ　まま母の
蛇性をひめた　寝姿の
その黒髪に　見とれつつ
美しさゆえ　子は妬む

ふいに夢から醒めたように起きあがる、まま母。
あたりを見まわし、寝姿の円髷をほどき、黒髪のなかにかくしてあった撫子の花をとり出す。

〜七草に
かぞえ忘れし撫子が
火傷の痣と
なる女かな

その撫子と枕許の風呂敷包みを父親に持たせて悠然と歩きだすまま母。嬉しそうに、それについてゆく父親。

一陣の風が吹き起り、しんとく、顔を覆ってしゃがみこんでしまう。

3――髪切虫――国民学校の犯罪

・

黒衣、一枚の黒板を立てて、白墨で「修身」と書く。他の黒衣たち、学校机を運びこむ。しんとくをふくむ四人の小学生が入ってきて思い思いの席につくと、客席中央の仮舞台はいつのまにか教室となっている。

生徒1　雁に攫（さら）われました。

生徒2　誰が？

生徒1　うちの父ちゃん

生徒3　（悠々と煙草を一服しながら）嘘つけ、死んだんじゃんか。

生徒1　天上したんです。
雁が攫っていったんだ。
生徒3　大工が屋根から落ちたなんて言えねぇもんな。
生徒2　（笑う）「学校へ行くと先生が、親のない者、手をあげろ」
生徒3「四十九人のその中で」
生徒2「坊や一人が手をあげた」――おい、手をあげてみろ！
（生徒1、手をあげる）
生徒2「学校がえりの友達に」
生徒3「親のない者馬鹿にされ」
生徒1「いいえおります、天国に」
全員「小石並べてねています」

しんとく、一人だけその唱和に加わらず、じっと大切そうに壜を膝の上へのせている。手で蓋をしているので、中味は見えない。どこか、遠くからボーイソプラノで、「雁、雁、棹になれ」と唄っている声がきこえてくる。

生徒２　何か言ってみろ。
生徒３　何を？
生徒２　何でもいいから言ってみろ。
生徒１　一番星！
生徒２　消した消した、一番星消したぞ。もう、どこにも一番星は無くなった。
生徒３　勝手に消されると、
生徒１　帰り道がわからなくなります。
生徒２　そんなら、帰り道もゴム消しで消したるよ。
何でも消えるゴム消し買ったんだ。
生徒１　何だって？
生徒２　何でも消せるゴム消しだ。
生徒３　（煙草をもみ消して）見せろ！
生徒２　駄目だ、おまえに見せたら、取られる。
生徒３　取らんから、ちょっと見せろ。
生徒２　（首ふる）おまえの下心はわかっとる。おれを消して、じぶん一人だけ先公にかわいがってもらうつもりなんだ。
生徒１　いい女ですもんね、こんどの先公！
生徒２　おまえまで目つけてんのか。

しんとく　（ふいに吐き出すように）きらいだ！

生徒2　……

しんとく　あんな先生、きらいだ！

いつのまにか女先生、入ってきて、しんとくのすぐ後に立つ。しんとくの呪詛をきいて美しい眉は逆立ち、手の鞭は怒りでかすかに震えはじめる。

先生　（つとめて冷静を装いながら）また、誰かかくれて煙草を喫っていましたね。

三人　（一斉に机の蓋を鳴らす）ぼくじゃありません。

女先生、後手に組んで生徒のまわりを一周する。ふと、しんとくの膝の上の壜に目をとめて、

先生　それは？

しんとく　（素早くかくす）

先生　見せなさい！　何か入っているんです？

しんとく　（口をへの字）

先生　わかった、吸殻を入れる空壜ですね。（強く奪う）お渡しなさい。（と手にとると、中に一匹の虫が入っている）まあ、虫だ、黒天鵞絨（びろうど）かエナメルのように光っている。
長い触角が、まるで鋏のようだわ。

生徒2　先生、それは髪切虫です。

先生　髪切虫？

生徒1、2、3　（啼き声を出す）キッチ、キッチ、ギイギイギイ。

生徒3　女の髪を切って食べるんです。

先生　（思わず、じぶんの髪に手をやる）怖ろしい虫！　（と、急に猫撫声になる）しんとくさん、どうして、こんな虫を飼っているのです？

しんとく（答えず、その髪切虫をガバッと奪い返して壜の中へしまい、手で蓋をしてしまう）……

生徒1　先生、しんとくは、その虫でお母さんの髪の毛を全部食べさせてしまうんだそうです！（どっと笑う）

全員　キッチ、キッチ、ギイギイギイ。

生徒3　お母さんが丸坊主！

生徒たち、またどっと笑う。

先生　どうしてそんなことをするのです？

しんとく　ぼくの母はまま母なんです。

先生　まま母だって、いい母親は一杯います。きくところによると、あなたのお母さんはとても信心深いというじゃありませんか。

しんとく　仏様を可愛がることで、子供をいじめることを差引きしようとしているんです。

先生　まあ、非道（ひど）いことを言うのね。

しんとく　（強く、挑戦的に）先生！

先生　……

しんとく　ぼくのまま母は先生によく似ている。

先生　……

しんとく　もしかしたら、先生の正体はぼくのまま母のお母さんなんじゃありませんか！　ぼくのほんとの母は髪がみじかく、日なた草のようにいつもあたたかかった。ところが先生も、まま母のお母さんも、まっ黒く長いぬれ羽色の髪の毛をもっている。

先生　（いつのまにか、まま母の口調に似ている）読めたわ、しんとくさ

ん。あなたの狙いは、せっかく家庭におさまったお母さんを、何とか追い返そうという魂胆なのですね。そればかりか連れ子のせんさくぐるみ、親子丸坊主にしようとしている。それから離縁で、肺病で、見世物小屋で、蛇で、五十銭で、恨みで、縄で、欄干で、小児で、新聞記事で、花見なんだ。さあ、皆さん。言いつけをきかない子に罰を与えます。見せしめです。よおく見ておきなさい。（鋭く）

しんとく、ズボンを脱いでお尻をお出し！

（と鞭をふりあげる。生徒たち、一斉に、体を揺すぶって髪切虫の声で啼きはじめる）

全員　キッチ、キッチ、ギイギイギイ。

キッチ、キッチ、ギイギイギイ。

しんとく、ズボンを半分おろす。眉を逆立てた先生の鞭がふりあげられたところでストップモーション。

変調した学校唱歌が遠くからボーイソプラノで流れてくる。

〽村ノ学校ノゲンカンノ

　向ッテ右ノ桜ノ木

ワタシノ子ドモガ　植エマシタ
ソノ子ハトウニ　戦死シタ

コノ学校ガ立ッタトキ
ウチノオ墓ニアッタノヲ
死ンダアノ子ガ掘リダシテ
カツイデ行ッテ　植エマシタ

アノ子ハ十ニデ桜木ハ
アノ子ノセイヨリ低カッタ
ソレガ今デハ学校ノ
二階ノマドカラノゾイテル

キッチ、キッチ、ギイギイギイ。
キッチ、キッチ、ギイギイギイ。

しんとく　（ふいに一人だけ、その活人画から脱け出して）今だ！いま、大急ぎで家へ帰れば、ぼくの方が早く着くだろう。そうすりゃ、先生に化けたまま母の正体がはっきりするのだ。

それとべ、髪切虫！　（と、投げた礫のように、一目散！）

4――鬼子母変

・

ゆっくりと琵琶語りで

〝学校帰りの近道は
線路を一つとび越えて
芸者の置屋の路地裏を
右へまがれば煙草屋の
電信柱の二本目に
今日もかくれる
ひとがいる
いろは紅入り友染の
うしろ姿の櫛巻きは
まぶたの母の

風呂あがり

語り手「まさか、そんな筈は……」と呟きながら、しんとくは立止まり、二、三歩あとをつけますが、ひとちがいとわかって早足でわが家へ駈けこみます。

拍子木の音と共に30ワットの電球がともる。
ちゃぶ台を囲んで、しんとくの父、まま母、その連れ子のせんさくが坐っている。箏の曲が奏でられ、それがラジオのごはんどきの放送「たずね人」のアナウンスと重なりあっている。
しんとく、肩から学校鞄を吊って駈けこんできて、ガラガラッと戸をあけて、そこにまま母が坐っているのを見て、びっくり仰天！

しんとく　アレッ、
もう帰ってきてやがる。

語り手　と、思わず、息をのむ。今日こそは、学校の先生に化けた

ままはより、さきに帰った、と思ったのに、どう先まわりをされたのか、ままはもう家に帰って晩ごほんの仕度をして待っていて、

ままは　しんとく、おそかったじゃないか

語り手　と言うのでした。

ままは　さあ、ごはんですよ。

早く手と足を洗っておいで、

一陣の風で、電球が消えそうにゆらめく。

みじかい家族の描写の演奏。

四人、正面を向きあって、茶碗と箸をもって、

せんさく　お父さん、家尾守家のお母さんをください。

父　ありません、お母さん、金野成吉の子供をください。

ままは　一枚とられました。せんさく、国尾護家の犬をください。

せんさく　ありません。お父さん、家尾守家のお母さんをください。

父　ありません。さっきもありませんと言った筈だ。お母さん、金野成吉のお母さんを下さい。

しんとく　ぼくの番がまわってこない。同じ札を四枚ももっているのに。

父　お母さん、金野成吉のお母さんを下さい。

しんとく　その札なら、ぼくが持っている。

まま母　いいえ、ありません。わたしの番です。せんさく、国尾護家の子供をください。

せんさく　一枚とられました。

でも、いくらやっても母札が集まらないことには、「家族合わせ」の勝負になりません。

まま母　ということは、

せんさく　だれかが一人占めにしているということです。

父　同じ札を四枚、

せんさく　しかも、母札ばかり集めて、

まま母　じっと汗ばむ手の中の、

台詞をうけて、そのまま合唱となる。

〜じっと汗ばむ手のなかの

　家族あわせの

母札は
夜の小川に流そうか
それとも空地に
埋めようか
ひとり去（い）にたい
あの町こえて
いんであなたの顔みたい

寺へ三年
米屋へ五年
奉公しようか　家出ようか

鬼のまま母
また洗い髪
白いうなじが　うつくしい

憎い　憎いと

じゃまものにされ
いつのまにやら、土人形

土の人形も
あなたを追って
町をこえればひとになる

5――怪人柳田国男博士

・

しんとく、一人、脱け出してきて、暗闇の中で光っている壜の中の髪切虫をじっと見つめる。
拍子木が一打ちされると、背後の家の灯りが消えて、しんとくの目の前にどこからあらわれたか、一人の復員服の男が立っている。

しんとく　アッ、柳田のおじさん。

柳田　よく覚えててくれたね。いかにもわたしは柳田国男だ。

しんとく　今日は、ずい分おかしな恰好しているんですね。

柳田　（とってみせて）つけ髭だよ。――これは蔓だ。きのうは、こっちの鼻目鏡をかけていたからね。わたしは毎日変るんだ。

しんとく　おとついは「少年倶楽部」のさし絵でした。たしか黒覆面をしていましたね。

柳田　そう。その前に逢ったときは、山高帽の空気男だった。その前は駅前キネマの映写技師、そして、その前は陸軍士官学校出入りの日の丸弁当の主人。またその前は、高度三千メートルの空からバラまかれたデパートの開店ビラを観察する物干台の天文学者だった。わたしは、もうずっと前からきみのまわりにいた。ただ、きみがそのことに気がつかなかったのだ。

しんとく　今日はもう、電球売りじゃないんですね。

柳田　あれはやめたよ。電気の球は、じぶんが明るくなるだけで、家そのものを明るくするわけじゃない。しかも、電球の下を明るくすると、その分だけまわりが暗くなる。暗いところでは、いつも侏儒が畳をめくって田を打っている。豊作不作、電気の悪魔だ。

しんとく　（その手品使いのような手つきに圧倒されている）……

柳田　それで今日から、これを売ることに方針を変えたのだ。（と、黒い円形のボール紙のようなものを取りだす）

しんとく　何です、これは？

柳田　穴だ。

しんとく　（驚いて）穴？

柳田　そう、穴だ。

不思議な穴のテーマが、夜をつつみはじめる。

柳田　（あるいは唄）これを、
ぴったりと壁に貼りつけると、そこから壁の向うへもぐっていける。
これ一つで、
世界中に出口ができる。
ゴムのように、
のびちぢみ自在、
持ちはこび自由、
こうして、小さくたたんで、
のぞき穴にすることも、
床の上にひろげておいて、
おとし穴にすることもできる。

しんとく　信じられない、

穴を持ち歩くことができるなんて、
柳田　ホラ、こうやって、
地面におくと、それでもう、
下へ降りてゆくことも、
できるのだよ。
しんとく　おじさん！　（思い切って）
ぼくに、この穴をゆずっていただけませんか！
柳田　借してあげることならできる、
だが、ゆずる訳にはいかない。
これはまだ、発明の段階であって、
未完成品なのだ。
たとえば、
この穴の蓋をどうするか、
ということも解決していない。
しんとく　借してくれることなら、
できるのですね。
柳田　一日だけなら。

しんとく　ありがとう、おじさん！

と、穴を手にとり、地面において。

しんとく　ほんとに、地下へ降りてゆくことができるのだろうか？
深さはどの位なのだろう。
梯子はついてるだろうか。
足をおいたとたんに、
まっさかさまに落ちてゆく、
なんてことはないだろうな。
（と覗きこむ）
やあ、まっくらだ。
地下も天と同じように、
銀河がキラキラ輝いているぞ。

と、顔をあげる。
もう、そこには、柳田国男おじさんは、いない。

アレ、おじさんが消えた！
（あたりを見まわして）
よし、今のうちだ。
（と、穴へもぐりこむ。半分もぐったところで、）アーッ！

と叫ぶ。頭がつかえたのか、まっさかさまに墜ちたのかわからぬうちに暗転し、大星雲のように、穴――地下世界のテーマがひろがってゆく。

6――地獄のオシラガミ

・

暗黒のなかで地を穿（うが）つようなひびき。
そして鐘乳洞の水滴音のような 谺（こだま）。
ややあって地獄の人びとが呼びかわしあう声が、蓮の糸で曼陀羅を織るように、艶めかしく流れこんでくる。
それは、紺泥の地に金色で三拾三所御詠歌でも書写するように合唱となり、あたり一面にひろがってゆく。

(一)　法華経文の反復
(二)　鳥の啼声
(三)　合唱

〜なきははの　めぐみも　ふかき
やみのなか　ほとけの　ちかい
しるやしらずや

まいるより　たのみをかくる
むらさきの　くものゆくえが
ははのごくらく
のちのよを　ねがう　こころを
うらむまじ　ふりむくたびの
ははのくろかみ
ふりむかば　このよほろぶる
おとすなり　ふりむくなかれ
むらさきのたび

しんとく、ほとんど夢遊病者のように、さまよってゆく。

実は、柳田国男おじさんの扮した黒衣に、見えない糸でたぐりよせられてゆくのである。

地獄を見世物のようにして姥捨の大八車や捨て子の精霊二輪車が通る。行き交う人々の、どの一人として顔を持たないのだが、目をつむっているしんとくは、そのことに気づかない。

その背後から、数人の母親、あるいは鬼子母たちがゆっくりと集まってくる。

虎落笛（もがりぶえ）の吹き荒（すさ）ぶなかで、一人の母は娼婦になって手招きし、一人の母は地蔵を赤児のように背負って救いを求め、一人の母は巡礼すがたで、鈴を鳴らしている。また一人は、モンペ袴に防空頭巾をかぶってしんとくの名を呼びつづけ、しだいにしんとくをとりかこみ、手をつないで輪になってゆく。

しんとく、目かくしして、大切そうに、髪切虫の青い壜を膝にのせてかがんでいる。

語り手　生みの母

育ての母

名付の母
義理の母

かごめ
かごめ
かごのなかの母は
いついつ出やる
よあけの晩に
しんとく丸が
笛吹いた
うしろの正面
だぁれ？

燃え立つような緋縮緬、そのところどころに経文のようにぼかし文字の入った長襦袢、母は裾をはしょっていたのではなく、むしろ、褄（つま）を高くかかげて、しっとりとした裏地の紅から白いはだしの足首を見せて、しんとくにおいでおいでをしています。

うしろの正面にいるのが、まことの母のようにも思われるのです
が、しんとくは、ふりむくことができません。（いつのまにか、一人の喪服の女が入ってきて、その手をつないだ輪の中に加わって、しんとくのうしろの正面に立っている。一人だけ、長々とした緑の黒髪が地獄の月に照っている）

しんとく　（かがんで目かくしをしたまま、）ぼくのほんとの母は、ぼくを産んだために死んだ、ということだ。徳福（とくふく）を願って、神の憎みを蒙（こうむ）ったのだ。それは火事の夜の出来事だった。炎に包まれたぼくを抱いた母鳥に父は言ったのだ。

「命があれば、子をば儲けてまたも見る」と。

だが母は、

「一つ巣ごもりになるだにも、

世にも不便（びん）と思いしに、この子においてはえ捨てまい」

と、おのれを野火に焼け死んで、ぼくの命を救ったのだ。ぼくは、

その、仏の母の顔がみたい。

見てはいけないうしろの正面、あなたの顔を見てみたい！

と、パッと顔をかくした手を外してふりむくと、うしろの正面に立

っているのはまま母の撫子なのであった。

しんとく　あっ、あなたは、

と、けたたましく、まま母の撫子は哄笑し、どっと合唱がながれこんでくる。

〜しど
しど
ぼさつ
あられりうま
かみに
かんざし　はなふぶき
ちどり
ちのみご
ちまみれの
ままこいじめの　ままははが
おう　かわいやの
のう　かわいやの

でん　でん
たいこに
しょうの　ふえ
ふえにうかれて　おどりだす
てるてるぼうず　にゃ　かおがない
ぼうや　かわいや　にて　くおか
やいてくおうか
おにのめん

しど　しど　ぼさつ
あられりうま

哄笑　と地獄の祭ばやし、そして暗黒の花吹雪。
女はすべて母になって狂いおどり、百のてるてる坊主が、ころげおちて、のたうちまわる。

しんとく　畜生！　だまされた！

髪切虫出て来い！　出て来て、女どもの髪を切ってしまってくれ！
（と叫ぶ）

ゆっくりと、三メートルもあるような髪切虫が暗闇から姿をあらわし、まま母に向って、二、三歩あるきだしたところで、拍子木一つ打たれ、悪夢は消える。

7――附録の消しゴム

・

猫町の空地――あるいは学校の体操場の土を掘りかえして、何かを埋めようとしている少年がいる。

生徒2、である。

熱心不乱で、すぐそばに影法師のように一人の女があらわれたことにも気がつかない。女は、鬢がほつれて色蒼白く一見して病人とわかる。

女　何してるの？

生徒2　（びっくりするが笑いでごまかし）ヒッヒッヒ。宝さがしだよ。

女　宝さがし？

生徒2　そう……このあたりに、印度人の埋めた蛇皮の財布があるんだって。

女　嘘つけ。何かを埋めようとしてたんだろ。

生徒2　見てた？

女　（うなずく）

生徒2　（やや開き直って）見てたなら、訊くことなんかないんでしょう。

女　正直に言ってごらん？

何、埋めようとしてたか。

生徒2　ゴム消し。

女　（のぞきこんで）へえ、どうしてそんなものを？

語り手　猫町の空地。もう湯屋の煙突のけむりも消えて、犬の遠吠がきこえる時刻でございます。質屋の瓦斯燈に背後から照らされて、見知らぬ女の影が伸びてくる。四辺の人目を憚りながら、

生徒2　だれにも言うなよ。これはただのゴム消しじゃない。おれはこれで一番星を消したんだ。

女　……

生徒2　おれに路地のブルドックをけしかけた古着屋の隠居も消してやった。（手で撫でながら）これはにんげんでも消せるゴム消しなんだ。

女　……

生徒2　（涕声で）見ろ。ここんところがななめにすりへってるだろ。これでおれはうちの父ちゃんを消したんだ。おれが煙草のんでるのを見ていきなり殴りつけてきやがったからさ、ゆんべ、寝てるあいだにゴシゴシ消しちまった。

女　（半信半疑で）足から消したの？　それとも顔から？

生徒2　おぼえてないよ。目つむってやったからね。そんで（涕をつまらせて）朝起きたら、布団は空っぽになっていた。

女　まあ！

生徒2　（青いチリカミをとりだして）ごらん、これだ。このゴムの屑が、うちの父ちゃんだ。なむあみだぶつ。

女　ねぇ坊や、（と異常に興味を持って）

そのゴム消し、まだ一人位消せるわね。

生徒2　貸さないよ。これはもう埋めるんだ。

女　おねがい、一人だけ。

生徒2　（ギョッとして）えっ。

女　病気の女に、手を焼いてるのよ。

生徒2　どこに？

女　あんたの目の前に。

生徒2　……

女　あたし、よ。

生徒2　よしてくれ。気味悪い。

と、生徒2、少しずつ退ってゆく。女、手で招く

女　おねがいだから、……あたしを消して……

生徒2　いやだ。

そばへ来ないでくれ。

語り手　片手をうしろざまに、帯の結目丁（とん）とさして、小包一つとり

いだし中の金子をさしだして、

女　……これぜんぶあげるよ、坊や。新しいゴム消しが百も買えるじゃないか。

生徒2　おれはもう決心したんだ。もう二度と何も消しません。たとえ、うそ字書いても、そのままで押し通します。

女　（じりじりと）わからない子だね。口べらしのために売られて十年。あたしは、三畳ひとまの、うしろ指の淫売なんだ。一銭五厘で夕日を売って田舎を捨てたあの日から死ぬことばかり思いつめ、あっというまに十余年。ほら、ほら、またどこかでこおろぎが啼いている。田舎は今頃、おまつりだ、（と、おさえて）ガボッ！（と血を吐く）

生徒2　（おどろいて）肺病だッ！

一陣の風の渦巻くなかで

三十絃の箏が暗躍し、黒衣の詠唱で、

〜秋風や
ひとさしゆびは
だれの墓

ひとさしゆびに
経文書いて
遠い他国にとばしたや

なむあみだぶつ
とびたまえ
なむあみだぶつ
とびたまえ

と、いつのまにか闇の中から、一人、二人と死者のまぼろしたちがゆっくりと姿をあらわす。親父を先頭に、たとえば揚羽蝶をつかまえようとして消された一年志願兵、新橋停車場の電信柱の陰で酔客と抱きあっていたところを消された朦朧芸者、水色縮緬の扱帯を絡って、髪を三輪に結った少女娼婦。彼らは黒衣の見えない糸であやつられ、生徒2にせまってきて、救いをもとめるように手をのば

す。

生徒2　（思わず）アッ！　みんな消した筈なのに……

8――藁人形の呪い

・

童女、藁人形を持ってあらわれ、四囲を見まわし、誰もいないのをたしかめて、六寸釘と木槌をとりだす。

今日もかなしと思いしか
藁人形に釘を打つ
いとしきひとと知るゆえに
藁人形に釘を打つ

童女、「お兄ちゃん！」と言って、思いきりよく藁人形の額に六寸釘を打つこむ！

一寸法師、もんどりうって転げこんでくる。童女、それを見て大喜び、また釘を一本打ちこむ。一寸法師、また跳ねる。いつのまに

か、童女（もどき）が、劇場内のあちこちにあらわれて、壁に藁人形をあてがって六寸釘を打ちこみはじめる。その釘の音が交錯しあって一つの曲となる。昂まったところで、これまで跳ねまわっていた一寸法師が動かなくなってしまう。童女、それを覗きこんで、思わず、

「死んでしまった」

と呟く。

〽有りやの眉の
　夕月に
　髪はまもなく
　　肩過ぎむ

と、唄うともなく呟きながら、まま母の撫子あらわれる。あたりを見まわす。その撫子に呼びかけるように、独唱で、

〽花散る里に嫁ぎきて

何に惑いし愛欲の
（台詞で応えて）
夢のわが子の肌ならで
なべて遠きを傷むべし
（独唱で）
〜ここへと膝を指さして
招けば目にはうなずけど
（台詞で応えて）
三十弦の 絃（いと）きって
爪投げすてて身は逃ぐる

まま母　ほらほら、これがわが子の爪だ。母の乳房になづみきて、甘え立てたるむらさきの、爪切りおとし、たくわえし、黒塗り匣に十二年、まだやわらかく、いとけなく夕べの月に、似しさまは、指につまめば、身も細る。
かわいそうに、おまえは連れ子。見世物小屋から、購われきた、うしろゆびの小学生。これも観世音の、前世のたたりかな。もとはと

いえば、長男だったものを、何の因果か、この家に嫁ぎきて、花とは見えぬ夏草の、しんとく丸を兄と呼び、家継ぐことも、かなわざる。

（爪に語りかけるように）

でも、せんさくや、安心おし。

ことあるごとにわたしに楯つく、あのしんとくは、母の呪いできっと早死にさせてやるからね。

この卒塔婆には、ホラ、しんとく丸の戒名がもう十五文字。

〽されば大悲の観世音

　みずからこれまで参ること

　わが子を氏子に参らさむ

まま母　こうして、あたしのてのひらの上で砂のようにさらさらとこぼれる、おまえは爪。三日月なせる、この爪がうずく乳房を突かぬ朝とて無かりしものを（と、黒塗りの小匣にしまって、紅の紐をかけ）安心おし、せんさくや、兄のしんとくは、まもなく癩病にかかって死ぬのだよ。（と、六寸釘をとりだす）しんとくさえ死んでしまえば、何がなんでもおまえが家督……

〜鍛冶を頼みて宿をとり
六寸釘をば　夜にあつらえ
夜だに明くれば　清水の
地獄詣りの　紅い華

まま母、しんとくの戒名を書いた卒塔婆をとり出して、六寸釘をあてて金槌をふりあげる。
そこへ目かくししたしんとくが、地獄を迷いつづけていると思いながら、入ってくる。

しんとく　むなわけすぐる　はるがすみ　めいどのはての　いちりづか　ねみだれやすきわがははの　みじかくつめし　くろかみをたずねてくれば　こはいかに
思いがけぬところに立っているのは、まぎれもなく生みの母のうしろすがたか。
もしや、おっ母さん！

はっとして、思わず六寸釘と金槌をうしろ手にかくすまま母。

しんとく　その匂いは、（と、にじりようて）やっぱりそうだ。

（溜息まじりに）とうとう、地獄でめぐりあえたのだ。（と、まま母に抱きつく）

ぼくは今、まま母にいじめられて、まんじりともせぬ夜をすごしております。お母さん、ぼくは先立って逝ったあなたを恨んでいる。

（琵琶がそれを受けて）

〜お母さん、ぼくは先立って逝ったあなたを恨んでいます

と、泣く泣く泣く泣く

乳房の母の

ひと違い

抱きついてくるしんとくを

弄ばんとせんものか

まま母　そうかえ、そんなひどいまま母なのかえ。（と、作り声、作り声、作り声）

しんとく　はい、お母っさん、あれは鬼です。お父さんは、どうし

てあんな女の色香に迷うてしまったものやら。

まま母（ぐっとこみあげてくる怒り。しかし、しんとくの、まるで妻でも撫するような手つきに体はあずけたままで）

その女は、おまえを可愛かっておくれではないんだね？

〜ぐっと抱きよせ　まぼろしの
　母が女にかわるとき
　足につまずく石ころが

しんとく　おや、こんなところに黒塗りの小匣が……（と拾って、紅の紐をほどこうとする）

まま母　（思わず本性をあらわして）お止し、しんとく！　その小匣にさわっちゃいけないよ！（と叱る）

しんとく　アッ、その声は！

まま母　そうだよ。この声はあたしだよ！（と、束ねた撫子の花櫛を抜くとバッサリと黒髪が肩に落ちる。しんとく、驚いてまま母をつきとばして逃げようとするのを、ハッタと睨みつけたまま母が）かわいいわが子の

せんさくのため、おまえさんには気の毒だが、ひともきらいし、異例を授くるのさ。（と、金槌をとり出して、卒塔婆に六寸釘で）

〽身毒丸は十八才　十八本の釘を打つ
　月の七日が縁日で　七日七本釘を打つ
　　そりゃ、一本！

（卒塔婆に六寸釘一本、思わず右目をおさえてひっくりかえるしんとくに）

つづけて二本！
目が癩病　景色がくさる
目が癩病　景色がくさる

（ムムムッと、こんどは右目をおさえてのたうつしんとくに、和太鼓のとどろき）

七の社に七本打って
　いま宮殿に十四本
継子にくしや十二本

御霊殿にも十二本
眼つぶれよ十二本
水神鍬立てて十二本
母の呪いの十二本
夜叉ヶ池にも十二本

（まま母が、釘を一本打つたび、目を抑えたしんとくがのたうちまわる。いつのまにか、しんとく丸が二人にふえ、三人にふえ、どんどんふえながらのたうちまわる。まま母、鬼子母となって打ちまくり、黒衣、童女がそれに呼応しながら藁人形に釘をうちまくる）

のろい　（釘打つ）　掛声
くろかみ　（釘打つ）　掛声
くぎぼさつ　（釘打つ）　掛声
はかしょ　（釘打つ）　掛声
あかおび　（釘打つ）　掛声
さんぜんり　（釘打つ）　掛声
ははなればこそ　（釘打つ）　掛声
くぎをうつ　（釘打つ）　掛声

まなこつぶれろ　（釘打つ）　掛声
ままこしね　（釘打つ）　掛声
しねしねしねなむあみだぶつ
しねしねしねなむあみだぶつ

（連打、掛声、血煙あがって、数人のしんとく、すっかり動かなくなってしまい、折りかさなる。まま母。けたたましく哄笑する）

祈る験しのあらわれて
その上呪い強ければ
一百三十六本の
釘の打ちどが異例となり
にわかに両眼つぶれたり
ああいたわしや　しんとく丸
癩病患者となりたまい

（盲目になったしんとく丸、一人ずつ両目をおさえて、薄い光明をたずねなが

ら去ってゆく。まま母、仁王立ちで卒塔婆をおおう黒髪をふりかざしたまま、それを見送る。遠く人の声で、山鳩がほうほうと呼びかわしあううちに、暗転！）

〜〜縊られて
　藁人形に血と咲きし
　真赤な芥子の花ことばかな

9――この子　誰の子　鬼袋

・

語り手　法医学、見世物芝居、ほととぎす。

秋が去って春、春が去ってまた次の秋でございます。按摩たちは、夜のつれづれに風の音を聴きながら、いろは四十八文字を鋏で切って並べかえて遊びます。いろは、いろなし、ゆりれうす、ろけんやだいば、あらだらに、あらだらにだらの、人さらい、「家の光」新年特別号の、口絵になって、行方不明のしんとくは、どこへ行った

か、隠れたか？　癲病やんで家を捨て、あとの家督はせんさくが、仏壇みがいて、菊活けて、母の期待に応えます。いろはにほへと、ちりぬるを、ちりし、ちぶみの、ちのみごや。

中央の仮舞台の上で、二人の間引き女が脱穀機を踏んでいる。もうもうと、紛ぼこりが立ちのぼっている。どうやら、脱穀機の中に私生児を投げこんだあととも見える――やや長い舞踏場面――。少しはなれて、シラクモ頭の中学生が口を大きくあけて坐っている。

間引女1　この子だれの子、鬼袋

間引女2　袋破って水流せ

間引女1　ととの顔など見たくない

間引女2　生まれる前に踏みつぶせ

間引女1　ねんねん猫場の

間引女2　十五の乙女

間引女1　可愛い可愛いとだまされて

間引女2　泣いて悔んで

間引女1　帯買うてもろて

間引女2　質に置かれて

間引女1　流された

間引女2　（脱穀機を覗きこんで）この子、泣きもせず、おとなしいね。

間引女1　それじゃ、そろそろ、

間引女2　挽き殺そうか。

間引女1　ほとけの手拭

間引女2　紅殻色に

間引女1　染めて染まらぬ

間引女2　藁人形

踏む、と再び立ちのぼる粉埃。やや長く、ギッタンバッタン鳴っているが、ふいに、

間引女1　おや、何か

間引女2　ひっかかった

間引女1　帯か小袖か

間引女2　赤児の首か

間引女1　ちょいと、中を覗いてごらん

間引女2　やだよ、おまえが覗いてごらん

間引女1　（覗きこむ）

間引女2　（覗きこむ）

〜いま泣いた子はどこの子ぞ

爺から瘤を貰った子

婆から、痣を貰った子

顔にお白粉

頭に油

知らぬ父さん　花呉れた

知らぬ父さん　花呉れた

間引女1　誰か入ってる。

間引女2　（脱穀機に手をかけて引っくりかえそうとして）重い……

間引女1　（手伝って）ほんとだ、ちょっとやそっとじゃ動かんよ。

二人思いきって脱穀機を引っくりかえすと、中から陸軍兵の軍服を着た生徒2がころげて出てくる。

間引女2　ヒャーッ！（ととびあがって）こんなに大きくなってしまった！

間引女1　まさか！　こりゃ、おまえの子なんかじゃない。別人さ。

間引女2　別人？　（生徒2に）だれ、あんた？

生徒2　（素早く立って敬礼する）だれでもありません。自分はもう消えた人間です。

間引女1　何だって？

生徒2　他人の眼には見える筈がない。自分は自分をゴム消しで消してしまった男なのであります。

間引女2　（笑って）消えたつもりかも知れないが、

間引女1　あたしたちからはよく見えるよ。

間引女2　星が一つで二等兵。

間引女1　（さわって）ちょっといい男じゃないのさ、兵隊さん。

生徒2　（強く）うそだ。見える筈がない……自分はもう、こんなところにはいないんだ！

遠くから行進する軍靴の音が、ザックザックと近づいてくる。

間引女1　ホラホラ、お迎えがやってきた。

間引女2　こんなところで油売ってる時じゃない。

生徒2　うそだ！　誰にも見えない……見える筈がない……おれはどこにも行くものか。おれは、あいつらとは同じじゃない……、消された男、見えない兵隊、ゴム消しの屑になってしまったのだ。

（と絶叫する）助けてくれ！　助けてくれ！

音楽。喇叭の音が入り、その昂まりの中で溶暗。

10　――命の母の人さらい

・

からくり囃子で、

さあさあさあ　因果はめぐる糸車　からくりまわって渡り鳥　癩病やみのしんとくは　どこへ行ったか　かくれたか　風の噂もきかないよ　からくりからくり　からくりばったん

あとに残った　まま母と　つれ子と父は日もすがら　仏壇みがき
に明けくれる　二一天作　五九六九（ごくらく）の　家族合わせの　一枚を
風がめくれば　もう秋だ　からくりからくり　からくりばったん

いま頃どうしているのやら　まなこつぶれた　しんとくは　真実
一路の巡礼の　鈴を鳴らしてさまようか　鉄道線路に身を投げ
て　なむあみだぶつ　散ったのか　からくりからくり　からくり
ばったん

（帚をもって、まま母の撫子、あらわれる。その足許に、まるで箱庭のように一軒の家、電柱、そして仏壇。）

まま母　（じっと見おろし）ほらほら、これがあたしの家だ。そろそろ夕暮どき、電気がともる。せんさくが学校から帰ってくる。また、人さらいが薬売りに化けて、電信柱のかげから、そのせんさくを待ちかまえている。活動写真のビラが、風にめくれる。せんさくが立ちどまる。（ふいに、帚でその家、電柱などを掃く。家も、電柱もバラバラになり、塵芥のように掃きだされてしまう）暮れてゆく、秋の日の、こともなし。（一つかみの土をとりだして、舞台の上に蒔きながら）

〜さあ、これがほんものの土だ
ここに、もいちど抗打って
見世物小屋を立てようか
からしの花の　ててなしご
少女（おとめ）にありし日のごとく
蛇の鱗に泣きくれて
わが身、狂気のしおらしや
パラリ（と土をまく）
パラパラ（と土をまく）

それにしても、せんさく、今日は帰りがおそいわね。

と、ゆっくりとまぼろしのように見世物小屋の裏口が見えはじめる。ジンタの余韻がながれ、下足番が片づけをしている。一寸法師、秋刀魚の黒煙が立ちのぼる七輪をもって右往、左往。空気男が銭を算えている。

その、天幕の破れから中を覗いているせんさくに、まま母の撫子が

近よってゆき、そっと肩に手を置く。

まま母　（舞台外から声のみ）こんなところにいたんだね、せんさく。

せんさく　（おどろいてふりむく）

まま母　（声のみ）あんまり帰りがおそいので、母さん迎えにきてやったんだよ。

と、せんさくを抱いたまま、二、三歩あるいて、

まま母　お腹空いたかえ？　（と、むすびの包みをとりだす。毛深い腕が見える）

せんさく　（おびえながら、うなずく）

まま母　（大切そうに、そのむすびの包みをほどき）なら、お食べ！

（と、いきなりせんさくの口に石のようなむすびを突っこむ）

せんさく　ア、痛ッ！　歯が砕ける！（と悲鳴をあげる）

見世物小屋の芸人が、とんぼを切ってその二人の前を横切ってゆ

く。

まま母　ははは。（と太い声で笑い出す）

せんさく　（ハッとして）あ、おまえは！

まま母　そうさ、あたしはおまえの兄のしんとくだよ。おまえの母親に呪われて癩病に患り、こうして皮膚もまだらに溶けかかる。顔はにんげん、体は畜生、夜になりゃあ、純情可憐の鱗が光るんだ！

せんさく　（息荒く）何しに帰ってきたんだ、しんとく。

しんとく　おまえを可愛いがってやろうと思ってね。ぼくを呪い捨てたまま母の仮面をつけ、まま母に化けて帰ってきたのさ。どうだい、似合うだろう？　この緋縮緬。

せんさく　（後じさってゆく）

しんとく　さあ、せんさく。逃げずにこっちへおいで。いいことを教えてあげよう。

琵琶語りが入って

〜ひと恋し

赤き櫛もて梳きやれば
慈悲心鳥の
羽抜けやまず

せんさく　いやだ、そばに来ないでくれ。（と言うが、声は震えて金縛りにかかったように動けない）

しんとく　ああ、そのおびえた顔が、また可愛いねえ、せんさく。（と、にじり寄る）

せんさく　来るな、癲病がうつる。

しんとく　そう、兄弟は一つだ。おまえにも同じように癲病のたのしみを頒けてあげるのさ。（と、せんさくの学生服もズボンもすっかり脱がせてしまう。全裸にされたせんさくを、ひしと抱きよせて、いきなり）死ねーッ！

と突きとばす。

もんどりうってころげるせんさく。それを弄ぶように狂い踊るしんとく。

灯の消えた見世物小屋がパッと甦り、空気男も女力士も、ろくろ首も、一斉に踊りだす。空中でまわる足芸の樽。豆電球の点滅。それ

はさながら地獄の曲馬のように全裸のせんさく少年を生贄にして息を吹きかえした吸血の夜のひとときとなるのであった。

11――願人坊の赤頭巾

・

暗黒の中にひょっこりとあらわれた柳田国男、帽子をとって一礼する。

柳田　皆さん、こんばんわ。またお逢いしましたね。わたしは柳田国男、このたびは、東京都遺失物収容所の管理係に化けております。エー、今回はつけ髭の形もコールマン髭に変え、それに鼻眼鏡を組合わせて「少年倶楽部」二月号附録風にまとめてみました。ここにこうして机を一つ置いて、待っておりますと、次から次へと遺失物がとどけられてくる。かぎりなく落しもの、届けものはふえる。しかし、落し物をさがしにやってくる人など、一人もいないのでございます。

（独唱）

〜われとわが身の忘れもの
願人坊の赤頭巾

（台詞）

忘れもの落しものは、目も鼻もなく
ただののっぺらぼうになっている。

（独唱）

〜思い出したい赤頭巾
われはどこから来しならむ

（台詞）

30ワットの電球に
顔照らされた悪玉が
輪廻の秋にまたかくす
失せもの、消えもの、忘れもの

エー、この遺失物収容所は、真暗な心臓二つ分の広さです。しかし、それで足りるのか！　足りるのです。つまり、ものは考えよう

で、時によってはこの広い東京都全部が、遺失物収容所の倉庫だということもできるからです。しかも、ここでは、たった一人の落し主が留守であることによって、うまーい具合に秩序が保たれている。ハイ、いらっしゃりませ。

入ってくるのは侏儒車に乗せられた、身のちぢんだしんとくの父であった。

柳田　おッ、お父さん！

父　（あるいはバリトンの唄で）いかにも、わたしはしんとくの父である。

柳田　そりゃ、よかった。

父　（あるいはバリトン）ハテナ。

柳田　とうとう、決心がついたのですね！

父　（あるいはバリトン）何の？

柳田　自分自身を遺失物にする決心。

父　（あるいはバリトン、ムッとして）莫迦言うな。（大真面目になって）わたしは、ただ拾いものをとどけにやってきただけです。

柳田　拾いものですか？

父　そう、実は戸籍をひろったのだ。江東区亀戸一丁目の小栗という、戸籍だ。

柳田（部厚い帳簿をめくり、たしかめながら、ひとり言を呟く）そんな筈はない、何かのまちがいだろう。

父　まちがいなく小栗の戸籍です。

柳田　しかし、江東区亀戸一丁目には百十三世帯あって、それぞれの戸籍はちゃんとおさまっている。もちろん、小栗という名はありません。

父　百十三世帯全部戸籍がそろってる？

柳田　ハイ。一つも、遺失されておりません。

父　では、この小栗が籍に入ると、何かがはみだすことになる。

柳田　遺失物は、失くなったものを埋めあわせるものであって、余分なものをつけ加えるものではない、と、指導されておるのです。

父　しかし、それなら、

柳田　それなら？

暗闇の中に、印鑑の顔（仮面）がずらりと並ぶ。そして、その田中、山田、中川、日吉、小林、工藤……といった認め印が唄い出す。

（合唱）

〜なにかしらねど　ゆうぐれに
あおい輪廻が泣きじゃくる
たよりにならぬ父ゆえに
身はみにくくもあやつられ
知らぬ他国を三千里
わが子いずこと
らっぱぶし

きょうもきょうとて　見世物の
とんぼがえりや皿まわし
なかによく似た子がいれば
もしやとこえを
かけてみる
親のふしまつ　子のふこう
巡礼鈴をきくたびに

あおい輪廻が泣きじゃくる

侏儒車の中で泣きじゃくり、もだえ、狂いはじめるしんとくの父、「しんとく！」「許してくれ」と叫びながら侏儒車からころがりでると再び背がのびる。四つん這いで犬のようにあたりを嗅ぎまわりながら去ってゆく。と、共に三十弦の箏の音につれて、認め印たちが右往左往し、何かを探しまわる。

失なわれていないものを探すことの可笑しさが、やがて悲しさに変って、収容されている遺失物の人たちが、ゆっくりと舞台をよこぎって過ぎてゆく。

柳田　皆さん！　これが遺失物の実行です。まだ間にあいます。このなかに、あなたの落しものがあったら、どうぞ大急ぎでハンコをもってきて引替えに、お持ち帰りください。倉庫は、だんだん手ぜまになってきております。そして（と、つけ髭をバリッとはがし、鼻眼鏡をはずす）わたしも、ほんものの柳田国男にもどる時間になったようです。書斉に帰って、「遠野物語」のつづきを書くことにしよ

う。（糸のあやつりのように、ヒョイ、ヒョイと手足を顫わせながら）なにかしらねど、ゆうぐれに、あおい輪廻が泣きじゃくる、どいつもこいつも、忘れもの、世間は他人の遺失物、電信柱に人さらい、真実一路は紙しばい、はい、さようなら。（と消える）

12 ――犬印安産帯のはてな？

・

琵琶唄で、

〜ながれゆく
川のさだめの櫛巻の
櫛の高さの
愛染平野

家恋し
また暗闇をきしませて
髪切虫が
髪を切る音

ポッと30ワットのマツダランプがともると、父、まま母、せんさくの三人が向きあって、茶碗と箸をもって夕飯のひととき。

その背後――髪切虫の暗闇に、学生服を着たしんとくの額入り写真（黒枠で飾られた遺影）がある。

よく見ると、まま母と見えたのは、実はしんとくが化けた姿であった。（唄で、）

せんさく　お父さん、家尾守家のお母さんをください。

父　ありません。お母さん、金野成吉家の子供をください。

まま母　（実はしんとく）一枚とられました。

せんさく、国尾護家の犬をください。

せんさく　ありません。お父さん、家尾守屋のお母さんをください。

父　ありません。さっきもありませんと言った筈だ。お母さん、金野成吉家のお母さんをください。

と、ガラリと戸をあける仕草で、もう一人のまま母（ほんもの）が入ってきて、

まま母　その札なら、あたしが持っているよ。

せんさく　（ハッとして）ア、あなたは？

まま母　せんさく、ホラ、同じ札を四枚ももっている。ぜんぶ、母札！

せんさく　（あわてて、目の前のしんとくの化けたまま母を見返して呟く）信じられない。……

しんとく　（薄笑いをうかべて）どうしたの、せんさく、顔が真青だよ。

せんさく　お持ちの札を見せてください。

しんとく　これかえ？

と、差し出す。

手からこぼれる、札が四枚。

せんさく　ぜんぶ、母札だ！　信じられない！

まま母のさし出す札も手にとり、一枚ずつたしかめるように……

しんとく　（すっかり、まま母になりきってしまっている）せんさく、見ておいで。おもてに誰か来たようだよ。

せんさく　（口ごもる）……

しんとく　お母さんの言うこえが、きこえないのかえ？

せんさく　（救いを求める）お父さん！

父　見えない、わたしには何も見えない。（と、ふるえだす）

まま母としんとく、互いに歩みより、青い壜に目をとめる。

二人　（声を揃えて）おや、こんなところに、また髪切虫だ。何て、縁起がわるい……（と、鏡でも見るように、互いの顔を自分の顔のように見ながら、ほつれ髪をかきあげて）また、しんとくが置き忘れたんだ。（とかがみこむ）それにしてもしんとくは、どこへおのれを消したやら。

とっくに死んだと思っていると、

こんなところにまた、髪切虫が……。

（ハッと互いに意識して）おや、おまえさんは？

しんとく　わたしは、しんとくのまま母の、

まま母　撫子

しんとく　真昼は人目避けながら、

まま母　呪い殺したしんとくを

しんとく　時にいとしく思いだし

まま母　日傘で顔をかくしつつ

しんとく　墓地のあざみを摘みにゆく

まま母　赤く咲くとも鬼あざみ

しんとく　なさけはあつく燃ゆるとも

語り手　ふたり歌わん一節の
なかば穢せしわが呪い

まま母　（ふいに若い女のように恋い乱れて）ああ、しんとく、許しておくれ。わたしはおまえさんに好かれたかったのだ。

しんとく　（憑きものが、墜ちたように）だが、ぼくはおとなになるのが、おそすぎた。

語り手　おとなになるのが、おそすぎた。

子供でいるには、はやすぎた。子守唄など唄ってやるには、もうおとな。抱かれ寝るるには、まだ子ども。八十九十百まで添うて、死んで別るる中でさえ、花のうてなが露ほどの、神も許さぬ、母と子の、

しんとく　（ふいに母の着物を脱ぎ捨てて）お母さん！　もういちど、ぼくをにんしんしてください！

その形相に腰を抜かして、

父　化けものだあ！

と、せんさくの手をひいて逃げようとする。まま母、せんさくをひしと抑えるので、父だけがもんどりうって転げ出る。かすかに見世物ジンタが流れこんでくる。

まま母　（せんさくに）怖がらなくともいいんだよ。この家には、もう、おまえ一人しか男はいないんだから。

（そして、しんとくに）しんとくや、あたしだよ。きれいかえ？

（しなをつくって、しんとくを見、ふりむいて）　安心おし。しんとくは

もう、死んだんだ。

（と言う。もう、あきらかに狂っているのがわかる）　世継は、おまえのものだ。ホラ、鯉のぼりだよ。おまえのために、お母さんが買ってきてあげたんだ。

（パッとふりむき、しんとくに）　もういちど、もうにど、もうさんど、できることなら、おまえを生みたい、おまえをにんしんしてやりたい。

（合唱）

〜お乳たりない　寝足りない
るるるるるぶ　るるるるるぶ
お乳足りない　寝足りない
るるるるるぶ　るるるるるぶ
お乳足りない　寝足りない

しんとく、その母をじっとにらみ、着てる全てを脱ぎ捨てて、

しんとく　地獄！

と叫んで抱きついてゆくと、
まま母の黒髪、一瞬にして白髪にかわってしまう。
雪崩れるように合唱が堰を切る。

〜はは や　いちにん（和太鼓）
　にに ん　さんにん（和太鼓）
　よに ん　ろくにん（和太鼓）

暗闇の中から、それぞれ思い思いの意匠をこらしてあらわれてくる
母、母、母、すべての登場人物、母に化身して、唇赤く、絶叫する
裸の少年しんとくを包みこみ、抱きよせ、舌なめずりして、バラバラに
して、食ってしまう。
鬼子母神の経文、巡礼の鈴の音。
そして、すべては胎内の迷宮に限りなく墜ちてゆき、声だけが谺し
あって消えてゆく。

時合の鐘の音が一つ。
ごうん！　と轟きわたり、暗転。
あどけない女の子の声で、
この子泣いたら俵につめて
（合唱）
いろはにほへと　ちりぬるを
ちりしちぶみの　ちのみごに
ゆきなすはだを　おしげなく
土佐の清水へおくります
土佐の清水は海より深い
底は油で煮え殺す
母さん　顔なし　呼子鳥
お乳足りない　寝足りない

作品ノート

身毒丸

「身毒丸」は、一九七八年六月、新宿・紀伊図屋ホールで初演された。

当時の天井桟敷の新聞による惹句は、

「米――晨耕社会がつくりだした母神と子神、その死と再生との組替え」

「まま母に憎まれ、父に捨てられた少年しんとく丸が、母の仮面をつけて母に化け、復讐をたくらむ歌篇」

「謎のサーカス、紙芝居屋柳田国男おじさん。アッ、また流れ星が！」

となっている。

説教節の主題による見世物オペラ、というサブタイトルをつけられ

た、この「身毒丸」は、いわば天井桟敷の初期作品「青森県のせむし男」「大山デブコの犯罪」などの系列に属するもので、日本の伝統芸能のなかの根強い〈家〉本思想ともいうべき、家族の三角形の因果構造を、解体する試みの一つだったと言うこともできるだろう。

一対一の母神と子神に、役割を交換させたりしながら、母権制を背景とした農耕社会の〈祭〉と、他国からやってきた共同体、見世物集団の祭とを対立させてゆく主題の展開は、すでに私たち天井桟敷の映画「田園に死す」で試みたものの、反復である。

「天下一佐渡七太夫正本集」の中の、「しんとく丸」に「身毒丸」という字をあてたのは折口信夫であるが、まま母の呪いをうけて、

「めずらしや、何たる因果のめぐり来て、かやうのいれいを受

け、眼が見えぬ」

といった業病の因果には、「俊徳」よりも、やはり「神得」よりも、やはり「身毒」が一ばんふさわしいように思われる。

オペラとして書かれたこの台本に曲をつけたのは、J・A・シーザーであり、演奏に協力してくれたゲストは、宮下仲（三十絃）、半田綾子（琵琶）であった。（曲は、のちにビクターでアルバム化され、合田佐和子のジャケット挿画もあって、きわめて印象的な出来栄えをしめしている）

「信徳丸伝説を基にして、現代的解釈を加え、その血の因習、母神への信仰を、民俗の記憶にまで止揚して、西洋的なるものと日本的なものとを、いつのまにか〈二重写し〉としてとらえる。こうした劇の猥雑さにあふれたイメージは、足袋の福助（幸運をよぶと信じられている侏儒）、女力士、畸型のろくろ首、碁盤娘から、民俗学者柳田国男まで、すべて異化のモチーフにかわってしまう。演出の寺山は、今度もまた〈社会から見捨てられた特異な人々〉にサド・

マゾヒズム的な匂いと、肉体の極端なまでの酷使を加えることによって光を当てる。そして〈どん底〉から立ち昇ってくるパワーを、オペラとして謳いあげているかのようだ」（ＴＨＥ　ＹＯＭＩＵＲＩ）

当時のスタッフ、キャストは、次の通りである。

作・演出・寺山修司／作曲・演奏・Ｊ・Ａ・シーザー／美術・小竹信節／舞台監督・浅井隆／共同演出・Ｊ・Ａ・シーザー／共同台本・岸田理生／衣裳・メイク・蘭妖子／音響・森崎偏陸／制作・九條映子、小沢洋子

出演　継母（先生）・新高恵子／語り手（女学生）・蘭妖子／父・サルパドール・タリ／しんとく・若松武／せんさく・篠崎拘／見世物小屋呼込み男・根本豊／怪人柳田国男博士（生徒１）・福士恵二／生徒２・青山均／松葉杖の座長（生徒３）・平井元／間引女１・矢口桃／間引女２・末次章子／見世物空気男（侏儒少年）・市川正／一寸法師（足袋の福助）・日野利彦／女力士・蛭沢美季子／ろくろ首・カトリーヌ・ミュレル／中学生・藤本新吾／見世物碁盤娘・中山孝

子／帯娘・太田律子／侏儒少女・八鍬恵美子。この他に、ゲスト演奏として、宮下伸（三十絃琴）／半田綾子（琵琶・語り）／塩原昌代（ソプラノ・ソロ、娼婦）

盲人書簡・上海篇

見えない演劇、「盲人書簡」シリーズの第一作「人形篇」は、一九七三年九月、アムステルダムのメクリ・シアターで初演され、その後、ロッテルダム、ライデン、ブローニングンなど、オランダ各都市で巡演された。その後、同年十月に、ポーランドに招かれ、ワルシャワ、ポズナニ、グダイスクなどを巡演、ブロッワフの国際青年演劇祭で打上げた。

見えない演劇が、はじめに発想されたのは、市街劇の対極化として、演劇を「密室に閉じこめる」ための企みの結果であった。市街へ持ち出され、日常の現実原則との境界を取り除いてしまった一連の市街劇「人力飛行機ソロモン」シリーズは、その後も戸別訪問演劇、電話演劇、書簡演劇として、くり返され上演されつづけてきたが、その対極に、演劇を日常の現実原則から切り離し、観客と共に「密室に閉じこめて」、あらたな出会いの偶然性を生成したいという願望が生まれるようになった。その結果、私たち天井桟敷では、観客を迷路にとじこめ、歩かせ、劇を探させる「阿片戦争」という新作を一九七二年アムステルダムで初演した。